中国東北地域における満洲族の社会
―新賓満族自治県の事例から―

張　琳

人間社会環境研究科　博士前期課程 1 年

はじめに

2012 年、金沢大学の文化資源学フィールド・マネジャー養成プログラムで派遣され、中国遼寧省における新賓満族自治県で生活している満洲族を対象とした調査を行った。遼寧省は中国における半数以上の満族人が集中している地域である。特に、遼寧省の東部に位置する新賓満族自治県は１６世紀の末期から満族の発祥・発展の地として、歴史的に重要な地域となる。一方、新賓では清朝政府の崩壊や第二次世界大戦、新中国の成立、文化大革命及び改革開放などの激しい時代の変化に反映されながら、今日の新たな社会風貌が生まれた。今回のフィールド調査は当地で暮らしている満州族に対して、文化・宗教・教育などの側面から把握し、さらに満族社会にアクションリサーチを目指すものである。

一　調査日程と訪問先

筆者は 2012 年 7 月 20 日～ 9 月 24 日にかけて、中国遼寧省撫順市の新賓満族自治県で調査を行った。

『遼寧省新賓満族自治県概況』によると、2011 年新賓満族自治県の面積は 4,284 平方キロ、総人口 306,949 人の中で満族人口は 221,526 人であり、総人口の 72.2 パーセントを占めている。今度の調査は新賓満族自治県内の下房子、永陵、老城、網戸および新賓県市街の五か所の地点が含まれている。

二　調査対象

調査の対象は満族に属する三つの世代を有する家族と満州族に関連する教育機関、団体および観光地など二つの部分に大きく分けられる。

1　家族

調査対象家族

趙氏、李氏、郎氏、馬氏、肇氏、査氏、徐氏、趙氏という八家族である。

特徴

a　主な調査対象者は大体 67 歳―93 歳の高齢者である。彼らの一生は子供期の満州国―青年期の中国成立―中年期の文化大革命―老年期の社会主義建設など一連の事件を体験した。彼らは外部からの影響や内部的変化を体験し、多面的なアイデンティティを複雑に揺り動かされた世代である。

b　満族に属しており、李氏以外は昔は大家族であり、満族を代表する「八大姓」氏族である。

c　大家族として全員が集団生活する時代があったが、現在は、小家族に分かれていて、それぞれどの家族も子供たちは独立して少人数で暮らしている。

d　上の八家族は住んでいる村が異なっても、互いに知り合いである場合が多い。

2　機関、団体および観光地など

今回の調査では家族単位の聞き取り調査以外に、蘇子河、煙突山、清永陵、三覚寺などの観光地と永陵満族幼稚園、永陵満族小学校などの教育機関なども併せて調査した。これは、家族や個人からだけではなく、歴史・文化・宗教・教育などの側面からも重層的に満族社会について理解と分析を行いたいという意図からである。

三　調査内容

1　家族

上記したように今回の調査は八家庭を対象に実施したが、ここでは二つの家族を代表として、家族の歴史的背景や個人の経歴、宗教と信仰及び祖先祭祀などの

面から紹介する。

例１　趙氏

キーパーソン：趙徳新

趙家は正黄旗に属する清朝時代の皇室であり、満族としての姓は福陵覚爾察である。この七世祖班布里はヌルハチとの間に摩擦が起こし、貴族のシンボルであった赤帯が没収され、墓地を保護する役を任ぜられ永陵へ追放された。その後には復権し、趙徳新氏の曾祖父は新京（現在遼寧省遼陽市）における五品役人であった。曾祖父が書き写したという『福陵覚爾察氏譜書』は現在も、趙徳新の家に保存されている。

趙徳新の経歴は、1945 年に新賓県西堡（現在永陵鎮）で生まれ、今年 67 歳である。七歳の時に小学校に入学し、中学校を卒業した後、永陵購入・販売協同組合で就職した。現在は定年退職して無職である。

宗教信仰については、彼が８歳の頃、祖父が重病にかかったため、自宅でシャーマン儀式を行った印象的な場面を今でも覚えているという。しかし、その当時、国民党関連の大学を卒業したエリートであった父から影響を受け、シャーマンや仏教などをいっさい信仰しなかったと語った。他方、彼は「祖先板子」というものを昔からずっと設置し、また満族独特の「達子香」を自分で作っている。この趙氏は天、地、軍師などの祖先神を代表する祖先板が八つそろっており、その数はかなり多いと言える（皇帝の愛新覚羅氏の場合には最も多く、それが九つある）。慣習として現在でも、旧暦新年の大晦日から正月十五日にかけて「祖先板」と「族譜」を祀る。食事する前に、家族は手を洗ってからこの「祖先板」と「族譜」を下して、料理、蒸しパン、果物などを供えることが必須の行動である。

また、毎年 4 月 5 日の清明節と旧暦 7 月 15 日の鬼節には、年 2 回程度墓参りをする。清明節には草刈りした上で、お墓に「仏托」を挿す。「仏托」を挿すのは満族墓参りの特徴とみなされる。これに対して、7 月 15 日には必ず紙銭を焚く。今度の調査は、ちょう



写真１　趙氏族譜



写真２　趙氏の祖先板子



写真３　達子香



写真４　墓参り





写真５　家廟

ど旧暦の 7 月 15 日にあたったため、下房子の趙氏家族の墓参りに参加させてもらった。

ところで、墓地から 1 キロメートルほど離れたところに「趙氏廟堂」があり、それは「家廟」と通称されている。墓参りをする前に、まず家廟へ行って、家を護る神様に供え物をする。趙氏の家廟は「狐仙」(きつね) の胡大太爺、胡二太爺、胡三太爺、胡四太爺の四つの位牌を祀る。この家廟も年 2 回ほど行く必要がある。第一回は旧暦 7 月 15 日、墓参りと同じ日である。二回目は清明ではなく、新年の時にいかなければならない。そして、お供え物は二回とも同じものであり、その料理の内容は代々継承され、ずっと同じものである。家ごとに用意するものが異なることもあるが、趙氏の場合は豚肉、白菜、豆腐、春雨、鶏の料理五つ、及び蒸しパン、お酒、果物と決められている。

例２　査氏

キーパーソン：査樹源

査氏の満族姓は富察氏である。一世祖の査徳蘇は清朝初期の上級大臣であったというから、その頃から査氏は大家であった。査氏の家族は文、武、商の三つに分かれ、査樹源は武将の後裔であるらしい。彼は 1939 年 9 月 9 日に老城に生まれ、今年 73 歳である。彼の過ごした青年時代、中国社会は満州国や中日戦争





写真６　優勝証明書



写真７　シャーマン神鼓

などの混乱期に陥っていて、大きな転換期にあったため、彼は複雑な人生をたどっていった。

査樹源は母やおばさんの影響を受け、物語に興味を持ち、生まれながらの素晴らしい記憶力と表現力を具えていて、国や省レベルの「満族民間故事家」の名誉を授与されている。とくに、小太鼓を叩きながら物語を語る姿はとても魅力的な表現方法であるように思われた。彼が語る物語の中には、満族に関わる作品が少なくない。したがって、それぞれの作品を通じて、彼は満族の文化や慣習に関する知識を大量に獲得することができる。調査中、満族の歴史や儀礼、風俗などを筆者に紹介してくれた重要な情報源の一人である。とくに、「媽媽令」という満族民間に広く伝承されている子供の教育に関する独特な文化形式を教えてもらった。

宗教信仰については、査氏は敬虔な仏教徒であると言える。文化大革命が終了すると、新賓県での仏教協会成立の最初の提唱者となり、そののち仏教協会の副主席として活躍した。筆者は彼に満族のシャーマン、仏教及び地元の民間信仰について多くインタビューをした。また、彼がよく参拝するという仏教寺院「三覚寺」にも連れて行ってもらった。

子供の頃には満族の儀礼を厳格に守ったり、民族衣装や靴、帽子などを身につけていたりしたという記憶が残っている。家には今でも昔の「揺揺車」や「シャーマン神鼓」などが保存されている。特に興味深いこととして、現在でも、倉を「hashi」、お母さんを「nene」と言うなど簡単な満語を生活の中で使っている。

２　機関、団体および観光地など



写真８　揺揺車

蘇子河、煙突山

新賓の郷、村などの地名はほとんどその地域の自然や人文の特徴に基づき、満語で命名され、漢字で満語の発音を表わしている。漢字に転換する過程で、発音が少し省略されたりする場合もあるが、現在使っている地名もほとんどは清の時代からそのまま残っているものである。新賓満族のシンボルと言われる蘇子河 (その河に生息している鳥の名) と煙突山 (煙突の形をした山) はその代表的な一例である。

清永陵

世界文化遺産に登録された清永陵には、ヌルハチの祖先の墓が安置されている。清朝の皇帝および貴族たちは墓参りのため、ほぼ毎年この地を訪ねており、他の地域に比べて、新賓の満族は特に王朝と密接な系譜的関係にあると言われている。



写真９　蘇子河・煙突山





写真 10　清永陵





写真 11　仏堂・関帝像

三覚寺

三覚寺は新賓県市街にある仏教寺の一つである。仏堂の中には数多くの仏像以外に釈迦を守る護法としての関帝像（関羽　通称関帝、関公　三国時代の人物）が目立った存在である。新賓県の場合は 1604 年に関帝廟を建ててから、仏教の護国寺を作った。当時、ヌルハチは満族による中国王朝樹立のために関羽のイメージを利用しようとして、関帝を信奉し、仏教と合わせて民間に普及させた。そして、乾隆帝の時期になると、再び全国的に大規模な関帝廟を建設する工事が始まった。その結果として、清朝時代には全国のいたるところに数多くの関帝廟があり、新賓地域だけでも 268 か所にも達した。これは、統治者の主導によって、関帝信仰は民間に広く浸透して受け入れられた。

永陵満族幼稚園

永陵満族幼稚園は 1988 年に成立し、永陵鎮では唯一の公立幼稚園である。現在、先生 21 人、園児 190 人が在籍し、ほとんど全員が満族である。

徐主任の話によれば、幼稚園は毎年満族に関するイベントを二回行う。満州細工の実技や風俗慣習の体験活動などを通じて、子供たちが満族文化を直感的に知ることを目指しているという。筆者が幼稚園に足を踏み入れると、先生たちの手作りの飾りが壁にきれいに並べられていて、満族的雰囲気が感じられた。

なお、この幼稚園は地域の人々から高い評価を得て、入園希望の子供がだんだん増えたため、教室や事務室などが不足し、さらに規模を拡大しようとする計画があるが、資金などの問題によってまだ実現できない状態にあるらしい。

永陵満族小学校

永陵満族小学校は撫順市でもユニークな満語課程を設置している小学校である。校長の黄志勇先生に許可をいただき、6 年 4 組の満語授業を見学することができた。授業は前回のおさらい、語彙と会話の勉強および練習という三つの部分に分けられる。

先生たちは満語教育のために「五線四格」という新たな書き方を工夫して作り出し、学校はこの「五線四格」ノートを印刷して児童たちに配布している。この




写真 12　満族幼稚園



写真 13　満語授業



写真 14　永陵満族小学校

クラスの満語授業は 2 年前から始まったが、今では児童たちが簡単な日常用語程度なら使えるようになり、最も人気がある授業の一つと評価されている。

現在、一年生から週一回程度、満語の授業が行われている。さらに、満語の授業だけにとどまらず、この学校では「二重教室」を設けている。すなわち、児童たちは一日の授業が終わると、第 7 限目から満族の伝統的紙切りや踊り、物語などの授業を自由に選択することが可能である。

筆者は、満語を教えておられる広燕先生へのインタビューを通じて、満語授業の実態を把握しながら、いくつかの問題点に気付いた。第一の問題点は、この広先生本人も 2 年前に満語を学びはじめられたということである。先生は、2010 年の冬休みと 2011 年の夏休みの間に、吉林省で行われた満語授業に二回参加し、合わせて 42 日の集中講義を受けられたという。それ以外の多くの時間には、ネットやテキストなどの情報を利用して、手探りで自ら勉強を進められた。実際、先生ご自身も今でも満語を習得されているという段階にあり、先生のお話によれば、授業中に間違え、勉強を繰り返したということである。

第二の問題点として、統一テキストがないという点が指摘される。先生も児童も授業の連続性やスピードなどを確かめることが困難であろう。

第三の問題点としては、満語教育課程は小学校には設置されても、中学校になると引き続き勉強できないということが挙げられる。生徒は興味があっても、学校で勉強しつづけることが不可能である。

このように、満語教育はまだはじまったばかりであり現在では先生の個人的努力に負うことが多い。先生たちがどんなに努力されても限界があろう。体系的に継続して満語教育ができるような体制作りが必要である。

四　調査の成果と今後の展望

今回の調査を通して、新賓地域に生活している満族に限定されているが、そこから得られたイメージのようなもの、また自分なりに理解し感じたことをおおまかに、以下にまとめてみた。

1　満族文化

新賓満族自治県では、満族文化は「作られた文化」と「残された文化」という二種類の形式が存在しているように漠然と感じられた。

「作られた文化」とは政府によって展開された観光開発に関わっており、満族の伝統や文化に基づき地域の売り物として、だれでも知れるように満族をイメージするようなシンボルを作り出すことに成功している。町の看板などに溢れる満族文化の雰囲気は、新賓県に入ればすぐ感じられた。一方、「残された文化」とは満族家庭の内部で、祭祀や儀礼、飲食、言葉などの面にまだ残っているものを指す。この外部と内部にまたがる二つの部分を合わせて構成されている文化を有している新賓県は満族の雰囲気をよく伝えている。

2　豊富な人生体験

今度の調査対象は 67 歳～ 93 歳の年長者である。予想どおりに、彼らの人生は一連の歴史事件を体験している。とくに、戦争や人民公社、土地改革および自治県成立など国内外のさまざまな影響を受けて生活が変容し続け、波乱に富んだユニークな記憶を有している。

3　宗教信仰

新賓県は仏教、道教、キリスト教、天主教など多様な宗教信仰が共存している。とくに、仏教と道教、シャーマンはよく融合しあいながら、独特な民間信仰を形成してきた。つまり、そこで宗教は盛行すると同時に多元性を表わしてきたと言えよう。

4　祖先祭祀

満族にとって、祖先を祭ることは非常に重要なことである。「祖先神」、「保家仙」が宗教信仰と関連せず、祭祀は祖先の存在感や子孫たちのいい生活を護る安心感を与えるため、代々継承される慣習になった。

同じ祭祀でも、統一的儀式がないため、それぞれの家族は自らの方式で行い、祭祀儀式が多様化されている。

5　地方文化の形成

清太祖ヌルハチが新賓地域、さらに東北地域全体に及ぼす影響力の大きさと深さを実感した。ヌルハチは仏教と関帝信仰を普及させ、シャーマンと仏教および道教の融合を促進した。また、清朝の発祥の地として、ヌルハチに対する英雄崇拝のため当地の神話や歴史の中でヌルハチは主役として頻繁に登場している。そのため、ヌルハチとつながる文学、宗教、風俗などをめぐって他の地域とは異なった一種の地方文化を形成している。

これは漢化という問題と関わる。すなわち、新賓満族自治県の満族は漢化されたということが指摘できるという一方で、逆に漢族が満化されたのではないかという現象も見られる。満族の慣習、風俗、宗教はこの地域においては民族を問わず、あるいは民族を超えて、地域文化の一部分となって人々の生活に定着されているのではないかと考える。

以上の調査を踏まえ、新賓県の自然状況と生活環境を把握した上で、現地で生活している満州族とラポールを育成し、生活様式や慣習風俗、宗教信仰などの側面から満州族を全体から理解するようになった。今回実施したフィールド調査では、貴重な情報とデータを手に入れたが、2013 年 1 月～ 3 月にかけて再び新賓満族自治県に行き、満州族をめぐってさらに本格的な現地調査を行うことを計画している。

以上の要領でフィールド調査を十分に実施し、その内容を文化人類学の観点から分析した上で、満州族の生きざまや今後のありようなどの満族社会および少数民族の発展に役立つ研究成果をあげようと考えている。

参考文献

『関帝廟簡介』　民族主版社　新賓満族自治県仏教協会、撫順市社会科学院満族研究所編

『満族の家族と社会』　江守五夫・愛新覚羅顕琦　共編　1996 年　第一書房

『民族生成の歴史人類学―満洲・旗人・満族』　劉正愛　2006 年　風響社

『遼寧省新賓満族自治県概況』　2011 年　民族出版社